

寄稿

―世代を重ね「グローバル人材」の宝庫に
移民100周年を経た日系社会

堀坂浩太郎（ほりさか こうたろう）
財団法人海外日系人協会 常務理事
上智大学 外国語学部教授

1. 「移民」から「ニッケイ」の時代へ

契約移民781人、自由移民10人を乗せた日本人のブラジル移民第1船の笠戸丸がサントス港に到着してから100年になる。日本とブラジルでは公式行事のほか、趣向を凝らしたさまざまなイベントが次々と執り行われている。ブラジルの1980年代と日本の90年代の日伯合わせて2つの相次ぐ「失われた10年」を脱し、資源環境の急変の下、日本からブラジルへと熱いまなざしが向けられるようになり、一方、デジタル放送技術の日本方式導入などを通じて、ブラジルの対日関心が復活し始めた時期に、移住100周年を迎えることができ、何よりであった。

誤解を恐れずに言えば、友好的な雰囲気の中で進められた移住100周年によって、日伯関係の基調をなした「移民の時代」は、完全に終止符を打ったと認識してよいのではないであろうか。「移民」の歴史を忘却のかなたにおいてはならないし、辛苦を乗り越えた先人の豊かな経験は、これからもわが国とブラジルの関係を考える上で、貴重な参照事例を多数提供し続けてくれるであろう。しかし、1970年代初めに集団移住が終わって30余年が経ち、第1船の笠戸丸の乗船者はすでにこの世になく、6世が幼少期を迎えている時代である。移民というコンセプトで日系人を見続けるとしたら、彼らのブラジルでの存在を見間違えてしまう恐れがある。日本とブラジル、さらには日本と国際社会の“架け橋”としての彼らの役割もまた見落としてしまうことになりかねない。

移住100周年は、従来の日系人＝移民のステレオタイプな見方から脱却し、日系人をあらためてブラジル社会の重要な構成要素となったブラジル人として、さらに地球の反対の地にありながら、日本に特別な関心を示し続けてくれ得る存在として、日本人の接し方を

変える格好な時といえそうだ。最近では、漢字で「日系人」と表記するよりも、カタカナやアルファベットで「ニッケイ」(Nikkei)と表記される場合も多く、その方がふさわしいような状況さえ生まれつつある。

日本の要人がブラジル訪問時にしばしば使う「わが国同胞が貴国に大変お世話になった」といった常套句^{じょうとうく}の挨拶も、そろそろ終わりにして良い時機にきている。

2. 拡散する日系人の社会とイメージ

日系人とは、海外日系人協会の定義によれば、外国に定住の居を構えた日本人とその血を受け継いだ子孫たちとなる。ブラジルの場合、「一族の中で非日系人と結婚した者が一人もいない家族はもはや存在しない」と言われるほど、異なる人種との結婚が珍しくなくなった。驚くほど多様なニッケイが生まれてきている。

観光でサンパウロを訪れた日本人にとっては、日系人といえば、赤い鳥居と日本語の看板が立ち並び、ラテンの国ブラジルの中で異彩を放っているリベルダーヂ地区に結び付ける人が少なくないであろう。日系企業の駐在員にとっては、オフィスで、工場で、あるいは運転手となって、手足となって小まめに働いてくれる日系人を思い浮かべる人もあろう。そして最近では、日本人の日系人イメージを決定的にしているのは、何よりも90年代後半から急増した在日日系就労者の存在である。

多様な人種と民族で構成されるブラジル社会を反映して、日系人の多くは社会のさまざまな階層や職域、日本の23倍の国土を有する広大な地域に広く散らばり、中にはブラジルの国境を越えて世界へと飛び出す人も少なくない(在日日系就労者もその一部と考えるべきである)。その意味では、私たちが直接接する日系人は、

150万人を突破するブラジル日系人の一部にすぎない。

前述したリベルダーヂ地区は、「東洋人街」と言われるようになり、韓国系や中国系が増える中で日系人の存在はむしろ少数派となりつつある。日系コロニア(移住社会)の“総本山”的な存在となってきた「ブラジル日本文化福祉協会」(文協)がこの地区に残っていることにすら、違和感を覚える日系人が出てきている。それほどまでに、日系人は拡散し、それ故にこれまでのように一つの固定観念でもって見ると、間違いを起こしかねない。

幸い2008年は、記念式典やイベントのほかに、「移民の歴史」と重ね合わせて、現在の日系人の姿を追い求める多彩な報道がブラジルと日本で多数組まれた。本稿の紙数には制限があり、そのすべてに言及できないが、日本経済新聞(夕刊)が5月7日から3週間、18回にわたって取り上げた連載記事から、ブラジル社会のさまざまな分野で活躍する日系人の姿を見てみたい。

政界・官界では、▽ブラジル連邦下院のヴァルテル・イイホシ、ヒデカズ・タカヤマ、ウィリアム・ウーの3議員、▽空軍総司令官のジュンイチ・サイトウ大将、▽司法最高裁判事のマサミ・ウエダ、▽ブラジルの駐インドネシア大使エジムンド・フジタ、▽熱帯雨林の違法伐採を監視するブラジル国立宇宙研究所のヨシオ・シマブクロ博士やアフリカのアンゴラで日本との第三国医療協力に従事するサンパウロ大学心臓病院のリツコ・タニダ看護総師長、そして▽国連開発計画(UNDP)のシルビア・モリモト、国際連合本部広報局のファビア・ヤザキ、国際連合セキュリティ部門のアレキサンドラ・スガの3人の女性スタッフ。

農業ほか経済分野では、▽綿花王のワルテル・ホリタ、▽熱帯アマゾンの入植地トメアスの郡

農務局長を務めるミチノリ・コナガノやトメアス総合農業協同組合理事長のワタル・サカグチ、▽農機具メーカーとして成功を納め全寮制の農業専門学校で次世代の教育に専念するジュンジ・ニシムラ、▽小型旅客機メーカーとして世界の空を席卷するエンブラエルの副社長サトシ・ヨコタ、▽日本でもブームを呼んだビーチサンダル「ハワイアナス」を世界市場に売り込んだ靴メーカーの輸出担当アンジェラ・ヒラタ、▽全国29のホテル・チェーンを展開するチエコ・アオキ、▽不動産業界2位アビヤラの社長セルソ・ミノル・トクダ、▽大手金融グループ傘下の証券会社を率いるロベルト・マサル・ニシカワ、▽バイオディーゼルの原料・ヤトロファ（南洋油桐）の栽培に取り組むナガシ・トミナガ。

そして、スポーツ界や文化面では、▽名門サッカーチーム、サントスFCでサッカーの神様ペレーの背番号10番を継承する3世のロドリゴ・タバタ、▽映画「ガイジン―自由の道」で名をはせた監督チズカ・ヤマザキ、▽抽象画家トミエ・オオタケ、▽バラエティー番組の人気者サブリナ・サトウが登場した。

今から30年前、移住70周年の折に日系社会が輩出した文化人類学者、故斉藤広志教授が著した本のタイトルは「外国人になった日本人」であった。今回、日本経済新聞のタイトルは「ブラジレーロになった日本人」である。「ブラジレーロ」は、ポルトガル語でブラジル人のことである。ここで取り上げられた人物は一部の代表的な人たちとはいえ、文字どおりブラジル社会に溶け込み多様な分野で活躍する日系人の姿である。

3. 世界のニッケイ ―「知」のパイプラインに

実は私が、日系人の多彩ぶりとその独特な存

在に強く印象づけられたのが、2007年7月、サンパウロで開催された海外日系人協会とパンアメリカン日系人協会による合同大会であった。前者の海外日系人協会は、海外在住の日本人およびその子孫である日系人を支援するための日本の財団法人で、第2次世界大戦後に活動を開始して半世紀となる。一方、後者は、南北アメリカの日系人が81年に自主的に結成した団体である。

日系人を糾合する合同大会は初の試みで、中南米、北米、アジアの15ヵ国から500人近い日系人が集合した。ポルトガル語、スペイン語、英語、そして日本語が飛び交う会場にいと、それぞれの国籍を越え、ニッケイというエスニシティがさながら存在するかのような感覚にとらわれたほど一体感に満ちていた。彼らの活躍する世界は、さまざまな分野にわたり、いずれも自分たちの歩んできた道に自信を持っている。

その折に、私は、「イノベーションの時代：ニッケイを知のパイプラインに」（『季刊海外日系人』第62号、2008年3月掲載）と題する基調講演を行った。それは、異文化や異なるエスニシティの中で自分たちの居場所を築き上げてきた移住者や日系人に、日本とそれぞれが居住する国、さらに他の日系人が住む国々との間で相互に、異なる考え方やそれぞれの強みを伝達し共有し合う知のパイプラインの役割を期待してのことであった。

この時の講演の内容は、本誌2008年7・8月合併号（第661号）のメインテーマである「新時代に求められる人の国際化―グローバル人材の育成と活用」とも合い通じるものがある。同誌の中で、一橋大学大学院国際企業戦略研究科の清水紀彦客員教授は、知識社会化、グローバル化の中で求められる人材の要件として、「自律

的に思考し、合理的、客観的に問題を解決する能力を持っている」ことと、「異質の人と対等な立場で付き合いながら、新しいエネルギーを彼らの中に吹き込む力を持っている」ことの2点を挙げている。

日系ブラジル人を含めたニッケイは、正しくこのような要素を持った多分に自立型の人間類型であるように思われる。

この点は、30万人を突破する在日日系就労者についても言えることではないであろうか。地域住民とのトラブルや立ち遅れた子供たちの教育、一部の青少年が引き起こす犯罪などから「歓迎されざる存在」として、在日日系就労者はしばしばマイナス・イメージで受け止められてきた。しかし、異文化の中で活路を見いだすたくましさはかつての移民と勝るとも劣らぬものがあり、在日ブラジル人の間から新しい事業や人材が生まれてきてもいる。

どのような環境の中でも活動できるグローバルな人材が必要とされるこれからの時代にあって、ニッケイは、日本とブラジルを結ぶ移民に次ぐ、次の人的“架け橋”として再評価されていくべきであろう。実際に、最近話題となったブラジルの国営石油会社ペトロbrasによる日本の製油所買収や、ブラジル製小型旅客機エンブラエルの日売り込みの背景には、日系人の姿が見え隠れする。

その際に気になるのは、前出の清水教授が同上の論考の中で、「最も深刻なことは（中略）グローバルに通じる能力を持った人材が、日本の企業に魅力を感じていないことである」と言い切られている点である。

日本企業、とりわけ世界を活動舞台とする商社にとっては、身近なところにいるニッケイをどのように見てきたのか、あらためて検証されてもよいのではなかろうか。

表 中南米における海外日系人数（推定）

	推定数（人）	世界における割合（％）
ブラジル	1,400,000	52.7
ペルー	90,000	3.4
アルゼンチン	35,000	1.3
メキシコ	16,750	0.6
ボリビア	13,770	0.5
パラグアイ	7,000	0.3
チリ	2,600	0.10
コロンビア	1,200	0.05
ベネズエラ	533	0.02
キューバ	800	0.03
ドミニカ共和国	900	0.03
ウルグアイ	540	0.02
中南米合計	1,569,093	59.1
世界全体合計	約2,600,000以上	100.0

（注）1. 日系人推定数は、各種統計および在外公館の調査等による推定値（2006年値）

2. 推定人数は、日本国籍を有する永住者（日本国籍を有する永住者：原則として当該在留国より永住権を認められており、かつ重国籍を含めて日本国籍を有する者）および日本国籍を有しないが日本人の血統をひく帰化1世、2世および3世等の双方を含む

（出所）外務省 領事局